

政策策定のプロを育成する大学院

各国行政官との議論で学びを深める

政策研究大学院大学 公共政策プログラム (修士課程) 国際協力コース



政策研究科 教授 **大野 泉**
国際協力コースディレクター Izumi Ohno

専門は国際開発政策。2020年9月まで国際協力機構 (JICA) 緒方貞子平和開発研究所 (旧・JICA研究所) の所長を務め、現在は同研究所シニア・リサーチ・アドバイザーを兼任。国際協力銀行 (JBIC) や世界銀行などでの実務経験も持つ

1年間の修士課程

政策研究大学院大学 (GRIPS) は、政策研究を専門とする国内唯一の大学院として1997年に創設され、本年10月に25周年を迎える。世界

的な取り組みとなっている持続可能な開発目標 (SDGs) など、幅広い視野で課題解決に貢献する政策策定のプロフェッショナルの育成に注力している。国際協力コースは修士課程の公共政策プログラムの一つで、2020年4月に開設された最も新しいコースだ。

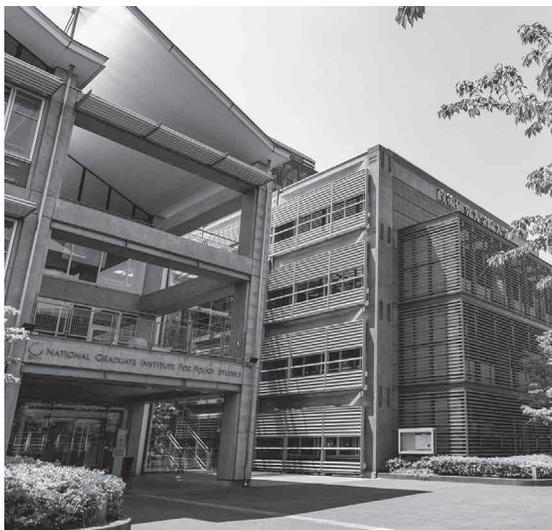
同コースの目的は、国際機関、政府・公共機関、企業、NPO、研究機関などにおいて国際開発・国際協力の分野で指導的役割を果たす人材を育成することにある。1年間の修士課程となっており、学生は日本人を対象とした公共プログラム全体の必修科目・選択必修科目に加えて、英語で行われる国際開発関係の専門科目を5つ以上受講することが求められる。修士論文は日本語、英語のいずれかで提出する。このよう

に、日本人が取り組みやすい日英併用システムとなっている。

将来のカウンターパートと議論

GRIPSの最大の特徴は、国際色豊かな学びの環境だ。学生の3分の2はアジア、アフリカなどからの留学生で、多くが母国で現役の行政官でもある。日本人学生も国際協力機構 (JICA) などが実施する政府開発援助 (ODA) 事業の実務者や海外協力隊経験者に加え、省庁、地方自治体や企業から派遣されている人が多い。

GRIPSの強みは、将来仕事でカウンターパートとなるかもしれない開発途上国からの留学生と一緒に学ぶことだ。実社会では立場が異なるが、学生という対等な立場で議論すること



東京・六本木とアクセスの良いキャンパス

■ 2023年度 公共政策プログラム (修士課程) 入試日程

入試種別	出願期間 (Web出願及び書類提出)	第1次審査結果発表	第2次審査	第2次審査結果発表
第1回試験	2022年9月16日(金)10時~ 10月14日(金)17時	2022年11月4日(金)	2022年11月10日(木) または11月11日(金)	2022年11月24日(木)
第2回試験	2022年12月12日(月)10時~ 2023年1月6日(金)17時	2023年2月2日(木)	2023年2月8日(水) または2月9日(木)	2023年2月24日(金)

※第1次審査は書類選考。第2次審査は、オンラインで面接を実施します。
※詳細については「修士課程国内プログラム学生募集要項」を参照してください。
※募集要項は本学ホームページに掲載されております。(https://www.grips.ac.jp/jp/admissions/guidelines/)

<入試に関する問い合わせ> 国立大学法人 政策研究大学院大学
アドミッションオフィス
〒106-8677 東京都港区六本木7-2-21
E-mail: admissions@grips.ac.jp

https://www.grips.ac.jp/jp/education/dom_programs/public/icc/



で、課題解決のための気づき生まれやすい。

英語の授業の例を挙げよう。途上国の政策策定・実施論では、開発政策の成否の原因を、具体例をもとに、国のリーダー、中央・地方政府の行政官、ドナー、民間セクターなど、さまざまなステークホルダーが関わる政策過程に焦点をあてて考える。開発計画の策定・実施、ODA 事業におけるドナーとの交渉、官民連携、地方分権化の課題など、学生たちは各国の経験を共有しながら解決策を議論する。

今年6月には、世界銀行で活躍していた専門家を講師に招いて、国別パートナーシップ戦略の策定手法を学ぶ実践的ワークショップを開催した。特定国を事例に、ドナーとして限られた資金で効果的に援助するために、どの分野のどの事業を優先すべきか、同コース学生と留学生が一緒にチームで検討し、パートナーシップ戦略を発表した。貧困対策のためには「少数民族が住む地域に複数の事業を集中的に実施すべき」という提案がでる一方、「国の制度づくりが重要で、貧困層が受益者となる国民皆保険や奨学金制度を導入すべ



世銀OGの佐藤桂子氏を講師に迎えた実践的ワークショップ（2022年6月開催）

き」など、さまざまな意見が出て活発な議論となった。

世界のリーダーとの接点

GRIPSには、開発経済学や地域研究などで優れた業績をもつ教員、また世界銀行、アジア開発銀行（ADB）、国際通貨基金（IMF）などの国際機関やJICAなどで指導的な役割を果たした経験をもつ教員が集まっている。

さらに、GRIPSは各界のリーダーや有識者が世界や日本のさまざまな課題や将来展望について講演する「GRIPS フォーラム」を年に十数回、開催している。このフォーラムは授業の一環として単位化されている。履修した学生は講演者に質問したり、時としてパネリストとして直接、世界のリーダーたちと議論する機会を与えられる。

個別指導で語学力向上も支援

GRIPSにはプロフェッショナル・コミュニケーション・センター（CPC）があり、語学力を伸ばすための支援も行っている。例えば、英語で論文を執筆するためにアカデミック英語の能力を上げたい時など、同センターの外国人講師から個別に指導を受けることができる。このため同センターは、日本人だけでなく英語を母国語としないアジア諸国からの留学生にも好評だ。

視点のアップデートが必要に

昨今の国際協力は先進国が一方向的に途上国を支援する構図だけでは成り立たない。少子化に悩む日本が途上国から外国人労働者を迎え入れたり、中小企業が途上国に進出したりと、その形は多様化している。現地の人々から学び、課題解決のために共に取り組む姿勢が重要になっている。

また、コロナ禍が示したように、グローバル化の時代に開発課題は複雑化している。国際協力の専門家は、ステークホルダーの声に耳を傾けて個別プロジェクトを進めるだけでなく、「良きリーダー」としてその先を見据え、国全体や世界との関わりも視野にいれて、取り組まねばならない。「良きパートナー」となるには、絶えず視点のアップデートが必要だ。

同コースでは、開発コンサルタントやNGO職員の入学も歓迎している。また、修士課程を経た後に、国際開発分野の博士課程コース「G-Cube-IDS」に応募することもできる。

あらゆる立場の学生との学びを通じて、新たな気づきを得る機会はいくらだろう。これまでの自分のやり方に疑問を感じることもあるかもしれない。そうした“もがき”も含めて、自分自身のやりたいことは何かを突き詰めていける環境が、GRIPSにはある。

■ 国際協力コース 主要な教授陣

教員名	専門
大野 泉 教授 コースディレクター	国際開発政策
山内 慎子 准教授 副コースディレクター	応用ミクロ経済学
高橋 和志 教授	開発経済学
木島 陽子 教授	開発経済学
工藤 年博 教授	アジア地域研究
高木 佑輔 准教授	アジアの政治
大野 健一 教授	産業政策論
仁林 健 教授	マクロ経済学

■ 国際開発関係の専門科目

・Development Economics
・Theoretical Foundation of Economic Policy
・Trade and Industrial Development
・Development History of Asia: Policy, Market and Technology
・Economic Development of Southeast Asia